

「人生航路」

—死から学んだこと—

1/10/2015

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

私は小学校の頃、母方の祖父が亡くなったことで、「死んだあと、自分はどうなるのだろうか?」と考えるようになりました。葬儀の時、親族の男性は白装束に身を包み、頭には白い頭巾布(△のもの)をつけ、火葬場に行ったのです。その印象が今でも鮮明に残っていることから、その当時「死」ということを初めて実感したのだと思われます。その時子どもなりに、親族の死を悼み、涙をこぼしたので、両親はいたく心配していました。その数年後父方の祖母が亡くなった際、私は裏山で遊んでいました。「早く家に戻っておいで!!」という母親の声に驚き、急いで家に戻りました。そのあとの葬儀のことといえば、「火葬場」での煙と独特なおいが強く印象に残っています。現在では、葬儀、火葬、納骨とも業者任せで行われ、火葬のにおいを嗅ぐこともありませんが、その当時は親族や町内が総出で家から棺を運び出し、積み重ねた乾いた幾重もの木の上に載せ、火葬しました。いわば死者への儀式でした。当時葬式のあと参列者で酒を酌み交わしたり、談笑したりしていることは大変不思議でした。人が死んだのにとという思いがあったからです。でも、このような少年時代に祖父・祖母の葬儀に立ち会えたことで、自分の死後を考えるようになった経験は何にも代えがたいものでした。大げさに言うと「死生観」を感じた最初だったのかもしれませんが。

その後、学生、社会人となり、親族の死より、仕事関係で葬儀に参列することが多くなりましたが、義務的に参列していたからでしょうか、「死」を考えることはなかったようです。それは、親族でない他人だからというのもあったのでしょう。

私も社会人となり、結婚し、子ども二人に恵まれました。そして、その子らの成長を見守ってくれた二人の両親がいました。孫可愛さに、両親たちは愛情を注いでくれました。同居の私の両親は、妻が保育園に迎えに行くことができないと代わりに行き、風邪をひくと近所の小児科に連れて行ってくれました。また、近くに住む妻の両親は、自宅に招いて子ども達と一緒に夕食を囲んだり、運動会には必ず観に来てくれました。そんな、楽しい生活を継続できたのは両親四人のおかげだと本当に思います。

しかし、2004年若くして認知症を患った義母は突然の肺炎により亡くなりました。それは入院半日後のことだったので大変な驚きでした。その後、2007年義父はガンであることが判り、5か月の闘病生活の末病院で亡くなりました。

その後、40年間朝晩仏壇で御経を唱えるのが日課だった私の父が2009年に亡くなりました。5か月の闘病の末やはり病院で見送りました。伴侶が亡くなったことで、介護生活にあった母親はショックを受けたようでした。それは寂しいというより、頼りにしていた人が居なくなったことへの不安のように思えました。しかし、その母も2013年、突然の痛みが生じ、入院の翌日に痛みをこらえての死を迎えることになりました。

このようにして、この10年間に私の最も近い人の死を目の当たりにしてきました。この間、我々夫婦に出来たことは、長い入院生活の中で、妻は毎日仕事帰りに見舞いに行ったり、私は休みのた

びに父を見舞ったり、老人ホームに入居の母への慰問でした。そして、時々元気な孫を連れていくことでした。今思えば、夫婦ができる当たり前のことしかできなかったかもしれません。しかし、時には意地を張り合ったり、時には話し相手になったり、苦痛の時は身体や手をさすったりして、「親子の情」を感じとった最初で最後の時期でした。親子がお互いに素直になれたというか、病人である親とそれを見守る息子や娘の間にかわされたものはこれまでの生活になかった、慈しみの言葉や会話だったと思います。

私はこのような、身近な人の死を通して、生きる人の尊さを知り、生きるものが次の世代にバトンを渡していくことを経験として学んできました。奇しくも、孫が誕生するたびに両親が亡くなっているのです。初めての孫が、ベビーカーに乗り、葬儀に参列していたのは大変印象的でした。やはり、輪廻転生なのでしょうか。私にはそう思えてなりません。

生まれてきた子は両親に育てられ、成長して、それぞれの家族を持ち、そして老い、死を迎えるのです。死を迎えることは自然の摂理とわかっていても、受け入れるのは容易ではありません。しかし、このことを判りえなければ安心してあの世には行けないように思えます。いつになったらそのような気持ちを受け取ることができるかはわかりません。それは死の直前かもしれませんが、多分老いへの人生航路の中で病気を患った時や定年を迎えた時、子どもの独立や伴侶を失った時など通して着実に感じていくのかもしれませんが。

私にとっては、まだまだあると思っている「人生航路」です。とにかく失敗があっても、やり直せばきっと何とかできます。悔いの残らない人生航路を進みたいものです。

「人生航路 正月もまた一里塚」

以上



ある特別養護老人ホームの玄関にあったもの